鶴人、引舟、鹿戀端女郎、牽頭女郎など、いふ、いろ〳〵の名がありヤス、引舟といふは、太夫に附て行く女郎のことでありヤス、譬ていはゞ、太夫は大船に表し、それにつなげる舟ゆゑ、引舟といふのでムリヤ正、萬端太夫についてゐて、取捌をする役でありヤス、江戸吉原でいふ、番新のことでありやすせい、それだから引舟は賣は致しやせん、浪花枕といふ隨筆物の說では、此の引舟といふハ、夕ぎりより初ッたとありヤす、夕霧は一ッ體京都の島原の女郎で、扇屋四郎兵衞といふ者の抱で、其扇屋が、寛文年中に大阪へ引越やした、其頃夕ぎりが下るといふ噂が、大阪中の評判となり、毎日々々川筋の見物が、山のごとくだッたとありヤス、夕霧の美艶きことは、何んともかとも譬やうがなく、其上萬藝に達し、行儀發明言語に述がたしといふもので有やすから、サア大阪へ來ると全盛日に增して、所々方々の揚屋から、大臣のまねくこと、引もきらずといふことで有ヤス、そこで夕霧も勤あぐんで、自分で一人ヅヽ女郎を揚て召つれ、諸方より一時に口の掛ッたとき、此揚女郎を、先の揚屋へやりやして、坐をもたせておき、初めから來た客を、順々に勤めて廻ッたといひやす、其とき此揚女郎のことを、引舟と名付けたとありヤス、夕霧より前は、太夫も引舟を連てあるきやすことは、夕霧から此方のことだといひやす、千長、それで引舟の譯が知れやした、モシ寛文年中といッては、夕ぎりも百七八十年になりヤス子、

牽頭女郎

〔一目千軒〕牽頭女郎の事 幷 藝子の事

唐土にては、六頭子、又牽頭とも云、是男女に限らず、座を持ものをいふなり、今太鼓と俗に書、是花をうてばなるといふ心とぞ、此說非也、是太夫、天神、自三味線彈ざる故、三弦ひかさんとおもへば、此女郎をよぶ也、又藝子といふもの外にあり、むかしはなかりしに、寶曆元未年にはじまる、

若衆女郎

〔嬉遊笑覽九 娼妓〕若衆女郎、古くありしものと見えて、吾嬬物語に、まんさくまつ右衞門、兵吉、左源太、きんさく、とらの助、熊之助などいふ里名、あまたあり、是もと歌舞妓をまねびて、太夫といひしこ